



## ～「過ちは繰り返しませぬから」～

「なんて素敵な子どもたちなのでしょう…（What beautiful girls and boys …）」

10月末の修学旅行、広島市の平和記念公園「原爆の子の像」の前で行った「平和集会」で、6年生が「アオギリの木の下で」という歌を心こめて歌った時のことでした。最後のフレーズ「過ちは繰り返しませぬから…」と歌い終える子どもたちを見つめ、涙をぬぐいながら拍手とともにそのご婦人はそう呟かれました。傍に立たれる紳士も同様に眼に涙を浮かべ拍手を送って下さいました。見わたせば子どもたちを取り巻く多くの方々が拍手を送って下さっていました。

そのご夫妻にお礼を言うと、イギリス（スコットランド）からの旅行者で、ご婦人は小学校の校長職を勤めていらしたとのことでした。そして、うち（西岐波）の子どもたちの歌声に深く心が動かされた（心から感動した）と言われ、歌の内容を尋ねてこられました。私は、「平和」「鎮魂」の歌であるということと、原爆死没者慰霊碑にも刻まれた「過ちは繰り返しませぬから」の英訳「For we shall not repeat the evil」を伝えました。お二人とも深くうなずきながら「ありがとうございました。皆さんに会えて、歌を聞けてとても幸せです。」と言われて平和資料記念館に向かわれました。

この「過ちは繰り返しませぬから」という言葉については、様々な立場からの様々な捉え方と考え方（賛否両論）があります。広島市の見解（碑文の趣旨）は

「原子爆弾の犠牲者は単に一国一民族の犠牲者ではなく、人類全体の平和のいしずえとなって祀（まつ）られており、その原爆の犠牲者に対して反核の平和を誓うのは全世界の人々でなくてはならない。」とあります。また作家の村上春樹氏は、スペインで次のようにスピーチしました。

「素晴らしい言葉です。我々は被害者であると同時に、加害者でもある。そこにはそういう意味がこめられています。核という圧倒的な力の前では、我々は誰も被害者であり、また加害者でもあるのです。その力の脅威にさらされているという点においては、我々はすべて被害者でありますし、その力を引き出したという点においては、またその力の行使を防げなかったという点においては、我々はすべて加害者でもあります。」

一方で、同じ日の平和資料記念館で「なぜこの資料館ではアメリカを責めないのか？都市を核兵器で攻撃した責任がアメリカにはある。日本にも歴史上の責任はあると思うか？」と留学生（バングラディシュ）の若者が尋ねてきました。ナイーブな内容を英語で伝えることは困難（無理）でしたが、私見を伝えました。まさに様々な立場からの様々な捉え方と考え方がある。これもまた事実です。

その上で、うち（西岐波）の子どもたちの歌声は、その「様々な立場からの様々な捉え方と考え方」を超えた「人の心をつかむ」力をもっていました。それはまことに温かで強いものであり、言い換えれば、民族や思想信条等を超えた「人と人をつなぐ」力そのものでした。これこそが、まさに平和の根幹に置くべき文化（芸術）の力です。その「人と人をつなぐ」力を、歌に乗せて伸びやかに表現する西岐波の子どもたちを心から誇りに思うと同時に、その子どもたちを慈しみ育て下さるこの西岐波という地域、さらに教職員を始め西岐波小学校にかかわるすべての方々に深く感謝した一日でした。

義務教育の最終段階（中学生）では「世界の中の日本人としての自覚をもち、他国を尊重し、国際的視野に立って、世界の平和と人類の発展に寄与すること」が目標とされます（学習指導要領、中学校道徳）。本校の子どもたちが、十五歳の春をそのような青年として迎えることができるように小中一貫して取り組んでまいります。また本校はコミュニティ・スクールです。皆様と「よかった」を共有するために、引き続きのご支援とご参画をよろしく願いいたします。 （校長 小松 茂文）